

Vol.  
21

Shumei International

# NEWSLETTER



Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world.

Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.

Shumei International

# NEWSLETTER

Vol.21



【表紙】

職業訓練学校 家具製作クラスの学生たち



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たち同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力し合い、世界平和に貢献していくことを目指しています。

## Special Topics

- 3 自然農法活動から豊かな社会を求めてさまざまな支援へ  
秀明インターナショナル 途上国支援担当理事 アラン・今井
- 6 ザンビアプロジェクト2022年度を振り返って  
NADPZ(ザンビア自然農法開発計画)代表 バーバラ・ハチプカ・バンダ
- 12 2023年 オックスフォード・リアル・ファーミング・カンファレンス
- 14 セッション 自家採種による生物多様性の保全と作物の  
耐久力向上によって健康的な食生活を促進する(質疑応答)
- 20 芸術と食×子どものみらい  
「滋賀キッズミュージアム in MIHO MUSEUM」



# 自然農法活動から 豊かな社会を求めてさまざまな支援へ

秀明インターナショナル 途上国支援担当理事 アラン・今井

2022年11月、新型コロナウイルスによるパンデミックから徐々に解放され、3年ぶりにザンビアを訪問しました。2005年11月に初めて自然農法によるメイズ(トウモロコシ)栽培を始めてから17年になります。インフラストラクチャー(生活や産業活動の基盤となっている施設)の充実と、特に携帯電話の普及から得られる物質的便利さの一方で、精神的な面で失われていったものも含めて、大きな変化を目にしてきました。5歩進んで4歩下がるような進展であっても、あくまでプロジェクトのオーナーシップは現地の農民たちにあるというスタンスで活動を続け、地域に根ざした持続可能な開発を目指して農民たちと関わってきました。

11月は雨季の始まり、農民たちは雨を待って種をまきます。途中この時期に自然の中で成長する立派なキノコを道路脇で購入し、久しぶりのザンビアの空気を味わいながら、今季も豊かな雨に恵まれて豊作を迎えられるよう祈りつつ現地に向かいました。



ルサカ国際空港(ケネス・カウンダ国際空港)

## 新しいリーダーに責任移行

ムババラ地区とチカンタ地区の農民リーダーたちが集まり、これから始まる雨季に向けて自然農法の理念・意義・方法の理解の確認をしました。私たちが到着すると農民たちはドラムを叩きながら歌って踊って迎え入れてくれました。彼女たちの中には17年前からお付き合いしているリーダーたちと共に、かつては少女だった女の子が立派に成長して踊っていました。各農民組合では新しい世代へとリーダーの交代が進んでおり、ザンビアではリーダーがその地位を退任した後、ぞんざいに扱われて活動への参加意欲そのものが失われていくケースが多いなかで、旧リーダーもリスペクトを得て会合に参加し、新リーダーをサポートしようとしている様子を見て何よりうれしく思いました。



アラン・今井たちを迎える農民たち

## 経験と知識の共有

会合が始まるといつも自然農法ショーのまとめ役をしているエドガが司会役に立ち、しっかりとまとめた彼自身のノートを確認しながら、対話形式で農民たちに発表させながら会合を進めていました。とても頼もしかった。彼のように自然農法を語ることに長けているリーダーが数名育っており、彼・彼女らは年に数回各組合を手分けして周り、自然農法研修会を続けています。数年に一度は干ばつに見舞われるなかでも自然農法の成果を経験し、地元農民の間にしっかりと自然農法が根ざしていることが確認できて安心しました。

## プロジェクトの他州への展開

ここ数年来、NADPZ (Natural Agriculture Development Program Zambia: ザンビア自然農法開発計画)の活動を耳にしたザンビア各地から、ぜひプロジェクトをシェアしてほしいとの要請が来ていました。その中で中部州と東部州に



農民会合の様子



## ザンビア州区分地図



昨年ムババラ地区の農民リーダーが赴き、現地の農民たちに向けて自然農法の研修と自然農法種子の配給を行いました。そして今回の農民会合にそれぞれの地域から二人ずつ参加してもらいました。農民会合終了後、ムババラ地区のリーダーとゲストの4人が輪になり、このプロジェクトへの質疑応答やマッシュルームや野菜の栽培、自家採種などについても意見交換をしておりました。特に中部州は首都のルサカから150キロメートルと近く、リーダーのクララさんは英語も得意で海外経験もあり、12,000名の農民を抱えるアソシエーションのリーダーとして中部州で活動しておられます。次回ザンビア訪問の際にはプロジェクト・コーディネーターのバーバラと共に彼らの地域を訪問する予定にしています。

縫製クラスの学生たち



## 青年支援事業

農村地域では主食のメイズや野菜の栽培は職業として農業を選択するというより、生き抜くための糧を得るために必要な手段です。中学を卒業してもその他の職業に就く機会がほとんどなく、多くの青年がそのエネルギーを持って余しております。そんな青年たちのために職業訓練の場を提供する企画を立てました。職業訓練センターのオープンと時を同じくしてザンビアでも新型コロナウイルスのパンデミックによる外出・会合制限が始まってしまい、昨年やっと徐々にクラスを提供できるようになってきました。

現在は家具製作クラスと縫製クラスの二つを提供しています。皆農家出身ですので、全生徒が自然農法も学んでいます。プロジェクトサイトの向かい側に生徒数1,500名を超えるコミュニティ・スクール（看護学校）が設立され、その看護師さんたちの制服を請け負うことになり、上手に縫い上がっていました。縫製を学んでいる青年も、家具製作を学んでいる青年たちも目を輝かせて生き生きとしていました。六カ月の研修期間、毎日自宅から通える青年たちは恵まれています。遠隔に住む青年たちからの要請があって現在寮を建設中です。電動ノコギリ、ミシンなどにより設備の充実が今後の発展の鍵になることを考えさせられました。

## 教育における美の重要性

ベンバ地区で自然農法活動が始まり、農民たちから子どもたちのための学校を建設したいとの要請があり2015年に幼稚園がスタートしました。2年ごとに二つの教室を持つ校舎を建設し、現在5年生まで120名を超える子どもたちが集まり、三つ目の校舎建設中です。ザンビアでは校舎を建設し、生徒たちが集まり、教師が住める家を準備しますと、政府が正式



な教師を派遣してくれます。現在4名の政府派遣の教師と地元の補助教員2人の6人が教育に当たっています。

3年ぶりに訪問して学校建物の傷みがひどいことを痛感しました。建築技術そのもののレベルだけでなく、教師も保護者も、傷んだものは仕方がないとそのままにしてしまう傾向は彼らの生まれ育った環境から来るもので、なかなか変わらないことを実感しました。改めて建物の維持管理を大切にしていこうというような姿勢をまず教師たち自身に育てていくことも大切な教育事業の一環であると感じました。

数年前に訪問した同様の環境の中できれいに保たれているマダガスカルの子供たちの写真を教師たちに見せました。そうした美しい教室に来る子どもたちが毎日学校で体験することは、家に帰って彼らの両親に話し、また成長してから彼ら自身の家庭環境にどのような影響を及ぼすか、計り知れない可能性があることを教師たちと共有しました。教師たちはとても感心したようで、「アラン、この次学校に来るのを楽しみにしていてくれ!」と言ってくれました。教室での授業内容だけでなく、掃除と片付けを徹底して、ザンビアの田舎で学校教育に取り組むことの意義の一つとして確立していきたいと考えております。



授業の様子

次世代に活躍する人材を育てていく



きれいに整頓された教室

## 今後の方向性

Shumei と現地農民の間に入り、コーディネーターとして活動してきたバーバラから5年後のプロジェクトの状況をどう考えているかとの質問があり、私は「農民たちが彼ら自身のプロジェクトとして自主的に活動を推進している状況の確立」と答えました。過去3年、パンデミックにより私もバーバラも現地を訪れることはできませんでしたが、遠隔でも連絡を取り励ましていけば活動は続いていることを今回の訪問で確認できました。

支援してほしいというメンタリティーを根本的に変えてもらうことは大きな課題ですが、農民同士が協力し合える組合活動を作ってゆくことこそ、気候変動による干ばつの危機を乗り越えていく鍵があると考えます。また彼らの自主的活動を尊重・推進していく一方で、Shumei としてずっと支援し続けるという姿勢を示していくことが大切と考えております。

将来アフリカにおける Shumei の拠点確立と先進国の教育とセンスを持ちながらも現地農民のメンタリティーを理解しその支援にコミットメントした次のバーバラ・ハチプカを見つけ出すことも今後の大きなテーマです。





バーバラ・ハチプカ・バンダ (左)

## ザンビアプロジェクト 2022年度を振り返って

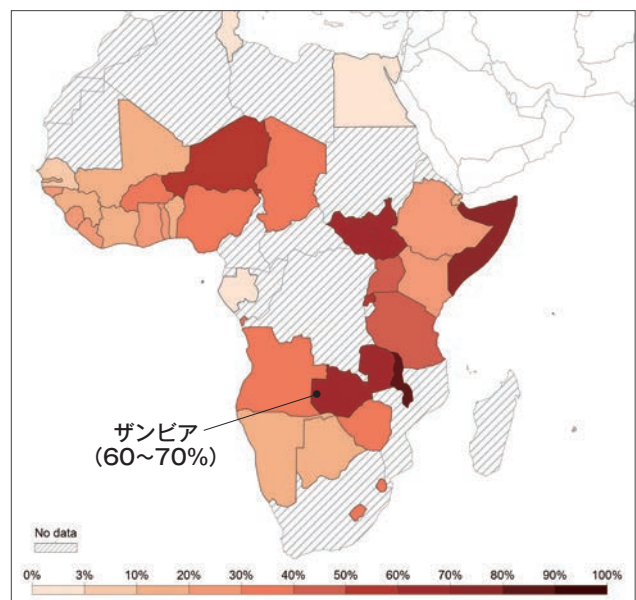
NADPZ (ザンビア自然農法開発計画) 代表 バーバラ・ハチプカ・バンダ

新型コロナウイルスのパンデミックによって多くの時間が奪われてしまったようにも感じますが、私たちは頂いているものに感謝し、自然農法を通じて農民がどのように生活を変え、コミュニティを回復しているかについての話を共有するため、今ここにいることに感謝しています。

農業は、アフリカで最も重要な経済活動です。小規模農家にとって野菜生産は経済の重要な位置を占めます。野菜は短期間でわずかな土地からでも効率的に現金を生み出すことができます。ザンビアでは人口の70%以上が農村地域に住んでおり、農業に従事することで食料と収入を得ています。

NADPZ (ザンビア自然農法開発計画) の目標の一つは、SDGs (持続可能な開発目標) にある“貧困削減”です。私たちは主に、環境に優しい農法である自然農法を通してザンビアの主食であるメイズ (トウモロコシ) などの作物を栽培するよう農家に奨励することで、この目標達成に貢献しています。

メイズは10月から5月ごろまでの雨季に作付けされ、6月に収穫されます。私たちは農家が家庭用野菜の生産を通じて安定した収入を生み出すために必要なトレーニングとインフラストラクチャー (生活や産業活動の基盤となっている施設) を提供することにより、農家を支援することに取り組んでいます。



1日あたり2.5ドル以下で暮らす人の割合 (2020)

出典: [ourworldindata.org/poverty](http://ourworldindata.org/poverty)

2005年にムババラ女性農民組合で活動を始めて以来、このプロジェクトが多くの人たちに受け入れられるものであるかどうか、ということが一番の課題でした。自然農法は、農民たちが家族を養うのに役立つだけでなく、農民たち自身に選択の機会を与えることで自立できる農家を育てていくモデルであると常に感じていました。その選択とは何の選択



のことでしょうか？ 商業的な罠にはまってその奴隷となるのか、自分たちで決めることのできる家庭と食糧の自由、そのどちらを選択するのかということです。これはここで述べているほど単純ではありませんが、農民たちに、自分は人から強要されてそうしているのではなく、自分の運命は自分の手の中にあるのだとの自信を与えてくれます。

昨シーズンは季節的に雨が遅く降り始め、降ってくると大雨になりました。政府は、新しく生まれたグリーン経済環境省を通じて、NADPZ プロジェクトのある場所を含む国のさまざまな地域で、鉄砲水と洪水の危険性があると農民に向けて気象警報を出しました。

自然農法プロジェクトの重要な要素の一つは、在来種の種子の利用と種子の保存です。在来作物は耐病性があり、また自然農法の作物はより強く深い根を持っているため、干ばつや洪水による気象条件の変化に対しても回復力を持っています。1 週間の大雨の後、プロジェクトサイトの自然農法メイズ畑に比べて、プロジェクトサイトから 10 キロメートル離れた慣行農法による商業用メイズ畑は深刻な被害を受けていました。これらの例を見てメンバーたちは、自然農法と伝統的な農法がいかに彼らの生存と彼らの土地とコミュニティの回復への鍵であるかとうことを実感しました。

プロジェクトマネージャーのビューティー・チョマが、ムニクラブの女性たちと、彼女らが自然農法を信じている理由について話し合ったところ、女性たちから次のような言葉が返ってきました。



自然農法のメイズ畑

「世界は終わりに近づき、どういうわけか私たちは神様に怒らせてしまったと感じている。今季は雨が遅く始まり、一旦雨が降り始めると、まるで神が怒って私たちを溺れさせようとしているかのような勢いだった。多くの圃場が洪水で破壊され、洪水がなかった場所でも水が多過ぎて、作物はあまりうまく育っていない。このような状況の中でも生き残った小さな畑があって、どこに属しているかを尋ねると、自然農法をしている農家だった。だから私たちは自然農法活動を続けるのです。なぜなら、神様は私たちが正しいことをしていると感じていて、それ故に私たちの畑を守ってくださったのだから」

## 自然農法の旅

ザンビア南部州における 16 年間の活動の中で、ザンビアの各地方から自然農法プロジェクトの拡大につながるたくさんの招待を受け取ってきました。そして 2022 年 3 月、私たちはついに東部州への 858 キロメートルの旅をし、自然農法について学びたいという女性農民クラブを訪問してきました。私たちのプロジェクトマネージャーは、4 人のデモンストレーション農民を伴ってチバタ地方を訪れ、シンダ地区のチャンクイ女性農民クラブ（カワララ村）とマクウェサ女性農民クラブ（ペトゥロムブギ村）の女性たちと出会いました。4 日間のトレーナー養成セッションでは、デモ農民が 56 人の新しいデモ農民をトレーニングしました。彼らは現在、東部州グループのトレーナーとして活動しています。

7 月にはザンビア中部州のムンプワ地区女性組合を訪問し、九つの異なるクラブから参加した 109 人の新しいデモ農家をトレーニングしました。自然農法トレーニングチームは、ムンプワの女性たちから非常に温かく熱烈な歓迎を受け、女性たちはトレーニングセッションに積極的に参加したとのことでした。私たちは将来プロジェクトと一緒にやっていけることを楽しみにしています。



慣行農法のメイズ畑



またペンバプロジェクトサイトの近くに住んでいるチエブ女性クラブは、一昨年、Shumei の支援を受けて設置された井戸を利用することで自然農法菜園を始めました。彼女らの菜園の成功に注目し、そこで栽培された自然農法野菜がどれほど美味しいかをお見せしたかったのです。プロジェクトコーディネーターは、デモ農家の責任者を菜園に案内し、女性たちに次のステップとして野菜の種子を採種する方法を教えました。これにより彼女たちは新たな種子を購入する必要がなくなります。私たちはチエブクラブの成功を祈り、これからも彼女らをサポートしていきます。

私たちのプログラムはほんの始まりに過ぎず、この新しいグループ活動にはこれから長い旅が待っています。私たちは、一步一步彼女たちの活動を支援していくことを計画しています。



Shumei が支援した井戸

## デジタル技術の利用

新型コロナウイルスのパンデミックのために思うように動きがとれない間、私は時間とエネルギーをローカルおよび国際的なネットワーキングに集中させてきました。NADPZ は、ザンビアとアフリカ全体で自然農法の重要なメッセージを拡大するために将来を見据えています。

ネットワーキングの結果、「アクセス・アグリカルチャー」という団体と新しいパートナーシップを構築しました。アクセス・アグリカルチャーは、農村地方の生活に影響を与えるために、現地の言語で質の高いトレーニングビデオをグローバルおよびローカルで利用できるようにします。このパートナーシップにより、若者たちがデジタル技術の使い方を学ぶことができます。そして高品質の農民トレーニングビデオを上映し、食料安全保障、気候変動への適応、生計の多様化、地域参加型のビジネスとコミュニティーの開発などに向けて、農村地域への影響を強化することを目的としています。この映像による発信が、ザンビア全体での自然農法の取り組み拡大に役立つことを願っています。私たちの将来の目標は、EcoAgTube (※) で現地の言語に翻訳した自然農法のビデオをアップロードすることです。これにより、私たちの自然農法プログラムの認知度がさらに高まると考えています。



アクセス・アグリカルチャーのスタッフによる研修

EcoAgTube : 持続可能な農業に関心を持ち、世界中の環境を維持する全ての人々のための新しいビデオ共有プラットフォームであり、彼らの経験と地元のイノベーションを紹介するウェブサイト



EcoAgTube のウェブページ <https://www.ecoagtube.org/>

## ムババラプロジェクトサイトで二つのイベント

女性の日パレード：自然農法プログラムの開始以来、ザンビア政府からの認知と積極的な賛同を得るための困難な道のりでした。これは国の不安定な政治事情によるものです。16年間で、二人の大統領が亡くなり、その結果政府に継続性のない複数の選挙が行われてきました。新たな政府が、農村地域の開発と気候問題、そして環境に配慮した農業を最前線にもたらすことに投資し、注意を向けることを決定したことは、新しい夜明けです。

プロジェクトマネージャーとプロジェクトリーダーたちは、ムババラ地区から新たに選出された国会議員ジョセフ・ムンサンジェ氏と会合を持ちました。彼は女性たちの努力、勤勉、献身を高く評価する考えの人でした。ムンサンジェ氏は、現政府が農村地域の女性クラブや協同組合を支援する上でどのように取り組んでいるかに言及し、NADPZ と Shumei がムババラ地区の女性たちと協力して行った取り組みは、ザンビアの他の地域でも再現されるべき例であると述べました。ムンサンジェ氏は、女性リーダーたちがプロジェクトを拡大させるための企画や活動を支援することを約束してくれました。

ムババラ女性農民組合のメンバーは、ムンサンジェ議員の助けを借りて女性の日パレードを開催することを決定しまし





おそろいの衣装で女性の日のパレードに参加

た。このイベントは田舎の女性組合のグループと政府との間で、新たな協力関係が始まったことを示すものとなりました。

イベントのテーマは「一人の女性を教育することは、地域を教育し、国を発展させることにつながる!」でした。私たちがこのテーマに決めた理由は、女性たちは家庭だけでなく地域社会でも基本的かつ重要な役割を果たしているからです。ムババラプロジェクトサイトで開催されたこのパレードには、チカンタ、ベンバ、ムババラの三つのプロジェクト地域から100人の女性メンバーが参加しました。女性たちはこの機会をスタイリッシュに記念するため、おそろいの自家製衣装を準備してイベントに参加しました。

政府主催地域農業ショー：パンデミックが発生する前、政府の地区農業局は毎年、全国の複数の地区のさまざまなゾーンで地域農業ショーを開催していました。地域農業ショーの目的は、アイデアや経験の交換、製品の展示を通じて、小規模農家の経済成長を促進する役割を果たす重要な機会を提供することです。これらのショーには、地元と近隣のコミュニティから参加し、農機具販売業者や企業も参加しています。地域農業ショーの間、地区農業担当者は指導者としてまた審査員としての重要な役割を果たします。彼らは、女性農民たちに環境に優しい農業、畜産に関する新しい技術を指導するとともに、審査委員会を構成し、展示農産物の審査をします。パンデミックのためにこの地域農業ショーを開催できませんでしたが、3年ぶりに復活し、今年はムババラプロジェクトサイトで開催されました。数百人のコミュニティの人たちが三日間のイベントに参加しました。

今年は、私たちの自然農法を実践・推進している組合からさまざまな代表を立ててイベントに参加し、自然農法が彼

女らの生活にもたらした変化を紹介することができました。組合のデモンストレーション農家と参加する会員農家には輸送手段と食料を提供し、ベンバ地区とチカンタ地区からの自然農法農民もこのイベントに参加して、仲間の自然農法農家を支援しました。私たちの自然農法農家の幾つかは、特に本年の洪水による不安定な生産シーズンにもかかわらず、優れた展示と収穫を達成することができたことで、賞をもらいました。ニュース報道によると、十分な収穫を得られなかったためにイベントに参加できなかった農家があり、これらの農民の多くはショーの延期を求めています。私たちの自然農法農民がショーに参加でき、自然農法活動をうまく紹介していたことをとても誇りに思っています。彼らの展示や発表を通して、より多くのコミュニティが私たちの活動に加わることを楽しみにしています!

## 職業訓練センター

私たちは農業従事者が新しい技術を習得し新たな収入源を得られるように、技術指導および社会的企業プログラムの開発に取り組んできました。職業訓練センターの開設がその一つです。このプログラムは貧困の中で暮らす人々の基本的なニーズを満たす収入創出の機会を提供することができます。

職業訓練センターは、皆さんの目にはとてもシンプルな建物に見えるかもしれませんが、ムババラ地域の学校に通っていない一部の若者たちにとっては希望の光なのです。2022年11月、10人の女性と10人の男性を収容できる寄宿舎が完成しました。ここはトレーニングプログラム中(6カ月間)の宿泊施設となり、職業訓練センターに関心を持ちながらも遠





家具製作クラスの学生



ミシンの扱いも上達



看護学校の制服

方に住んでいて参加できなかった多くの若者が登録できるようになりました。

次は家具製作クラスの学生が、学んだ知識とスキルを使用して、彼らと将来の学生が使用する2段ベッドを作ることです。木材や釘などの材料が提供され、工作の先生の助けを借りて、製作に励んでいます。また縫製の学生も参加し、伝統的な素材を使用して寄宿舎で使うベッドシート、布団カバー、カーテン作りを担当します。

私たちの次のステップは、職業訓練センターの自立に向けた社会的基盤を作ることです。そこでは、学生が食べる物を栽培し、作った家具や服の一部を販売することで研修に使用する教材を購入し、センターの自立に役立てます。そして電気配線、配管、溶接、料理のクラスなど、提供するプログラムの数を増やして、生徒がより多くの選択ができるようにしたいと考えています。

また、私たちは Shumei の支援により、三つのプロジェクトサイトのそれぞれにミシンと、女性たちに縫製のトレーニングを提供しました。ペンバ協同組合では、ミシンを使用してマウオファ・コミュニティースクールの新しいユニフォームを制作し、それぞれのユニフォームから収入を得ることができます。一方、チカンタ協同組合は、コミュニティに販売する伝統的な衣服を作っています。またムバラ協同組合は、伝統的な衣服を作るだけでなく、コミュニティ内の人々に修理サービスを提供しています。最近では、ハンチムナ看護学校の看護師の制服を作る契約を獲得しました。彼らの

素晴らしい作品が写真に写っています。彼らがさらに多くの契約を結べることを楽しみにしています。

## 最後に

2022年11月、アラン・今井が3年ぶりにザンビアに戻ってきました。女性農民たちは、自作の美しいザンビアの歌を歌いながらエネルギーと活気に満ちて彼を迎えました。彼女たちは、アランの乗った車に向かい、一緒に歩きながら、彼がザンビアに帰ってきたこと、多くの農民の人生を変えたこと、そして彼が自分たちのことを忘れてないことを喜び、大きな声で歌いました。女性たちはその夜、プロジェクトサイトでキャンプをし、歌ったり、踊ったり、太鼓をたたいたりして夜を過ごしました。翌朝、組合と農民クラブのリーダーたちは、来シーズンに備えて、自然農法の意義・概要・方法について確認の研修会を開催しました。このセッションには、プロジェクトサイトを初めて訪れた西部および中部州代表の農民も参加しました。また、アランは職業訓練センター、コミュニティースクールを訪問し、プロジェクトメンバーたちと再会しました。

2023年、プロジェクトサイトの女性たち、若者たち、およびリーダーたちは、実行したい何千ものアイデアを持っています。一連の会議と話し合いの後、彼らは2023年を食を中心にしたE3（Expansion 拡大, Education 教育 and Entrepreneurship 企業





アラン・今井と女性農民たち

精神)の年にすることに決めました。今年、指導者たちはコミュニティ内だけでなくコミュニティ外も含め多くの農家に関して、自然農法を推進する農民グループとブロックを作成することを計画しており、職業訓練センターとプロジェクトサイトの宿舎を利用して、食を中心とした持続可能なビジネスモデルを作成することを計画しています。

今年の活動の一環として、プロジェクトサイトの道路に面し

たところに長年レストラン建設計画が進められてきましたが、いよいよ屋根が付けられ、看護学校や地域社会が利用できるような商店およびレストランとして誕生する予定です。職業訓練センターは製菓プログラムを開始し、製造された食品はその商店で販売されます。

今年8月には自然農法ショーの再開を予定しており、私たちは何を提供できるのか楽しみにしています。

## 職業訓練センター生 紹介

### キリー・チュンバさん

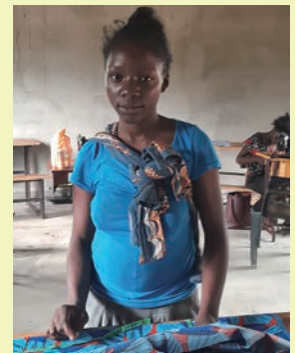
プロジェクトサイトから15キロメートル離れたマチャ区に住む25歳のキリー・チュンバは結婚して二人の子どもがいる農家です。彼は学校を卒業しておらず、この職業訓練校が彼の人生と彼の家族の生活をより良くする新しい工芸品を学ぶ機会であると感じています。



「家族を助けるために農業以上のものが本当に必要なので、クラスに参加するために週三日歩いて来ています。私は物を作ることを学ぶことに興味があるので、いつもこのような学校に参加したいと思っていましたが、そういう学校は遠すぎて通えなかった。そこに住むのにどれくらいの費用がかかるのかは言うまでもありません、家族もお金を払えません。この学校は私にその機会を与えてくれました。いつか自分のビジネスをしたいと思っています。自分の手で作った家具!この場所は最高です!!」彼は興奮して熱く語ります。

### フェイス・ムエンダさん

彼女は18歳で、8人兄弟の最年長で、プロジェクトサイトから10キロメートル離れたハンチムナ区に住んでいます。フェイスは十代で妊娠したために学校を中退しました。これは、地方のコミュニティの若い女性が教育を完了しない一般的な理由です。



彼女は子どもを育てるのに役立つ何かを探していたので、職業訓練センターに入学しました。「収入が必要だった!」彼女は大声で笑って言います。「両親は歳を取っているので、弟妹や自分の子どもたちの世話をする必要があります。学校を卒業していなかったので絶望的でしたが、この職業訓練校が始まったとき、その機会に飛びつきました。ここでしっかり学べば、家族を支える少しのお金を稼ぐことができます。」フェイスは、お金を稼ぐことができる小さな縫製業を望んでいますが、さらに「野菜畑の作り方を学び、そしてそれが事業としてどのように機能するかを学んでいるのです。私の将来は明るいです」と付け加えます。





会場となったオックスフォードタウンホール

## 2023年 オックスフォード・ リアル・ファーマング・カンファレンス



2023年、1月4日から6日までの3日間にわたってイギリスのオックスフォードで開催された農業会議（オックスフォード・リアル・ファーマング・カンファレンス）に参加しました。新型コロナウイルスによるパンデミックのため、オンライン開催が続いていましたが、14回目となる今回は、3年ぶりに現地で対面による会議が行われました。Shumeiからは、恒例となった太鼓演奏を5日の総会の開会時に2曲行い、セッションでは、アメリカからハドソンバレー・シード・カンパニーのK・グリーン氏を招き、「自家採種」をテーマに発表を行いました。

この会議は持続可能な農業や食のシステムを作るためにさまざまな分野の専門家や政治家、団体などが情報、意見交換を行うため2010年にスタートしました。本年の現地参加者は約1,800名、オンラインでは4,000名以上の方が参加しました。現在世界一のアグロエコロジーの集まりとなっています。アグロエコロジーの定義や解釈というのは種々あるようですが、一部を要約すると、食や農業の在り方だけでなく、生態系の一部としてわれわれ人間がどのようにあるべきかを考え、社会、経済、文化の多様性の向上を目指す運動とのことです。

今回、会議の講演者として、イギリス・シューマッハカレッジ創始者でエコロジー思想家のサティシュ・クマール氏、世界的環境活動家でナヴダーニャ財団を主宰するヴァンダナ・シヴァ博士、元アメリカのロデル研究所の主任研究員で、土壌微生物学者のイレイン・イングハム博士のグループなどそうそうたる面々が参加していました。



講演するヴァンダナ・シヴァ博士



オープニングの太鼓演奏にはメインホールの来場者以外に、オンラインで4,200名以上の方が試聴されました。演奏が終わると「信じられないパフォーマンスだった」「魂に響いた」「迫力だけでなく動作がそろっていて美しかった」など多くの称賛の言葉を頂き大変な盛り上がりでした。会場で配布されたパンフレットにも太鼓の説明として「その音は地球の鼓動を聴くようで、母なる大地と生きとし生けるもの全ての間に存在する調和というものを反映しており、伝統的に土とのつながりを引き出すものである」というオックスフォード・リアル・ファーミング・カンファレンスのメッセージともリンクした内容の記載があり、Shumeiの太鼓がこのイベントの一つの象徴的存在になりつつあるように感じます。



講演するサティシュ・クマール氏



オープニングセレモニーで太鼓の演奏

Shumeiのセッションは、オープニングセレモニーが行われた2日目に行われました。この農業会議が行われているタウンホールは歴史的建造物です。Shumeiのセッション会場は裁判を行う部屋が当てられ、以前Shumeiがセッションを行った部屋よりも広く、100人ぐらい入る部屋でしたが、満席となり立ち見の方が出るほどの盛況でした。司会を英国土壌協会のベン・ラスキン氏が行い、パネリストはハドソンバレーシード・カンパニーで在来種の種子の栽培・保存と販売に取り組み、種子のメッセージを芸術として発信しているK・グリーン氏、秀明インターナショナル理事のアリス・カニングハム、イギリスのエイツベリーで秀明自然農法を実施している今橋伸也さん、そして2021年、今橋さんより自然農法ラーニングプログラムを受講し、現在グリフィン・グロウーズ農場長として自然農法に野菜栽培を行っているメラニー・ナイトさんでした。

最初にK・グリーン氏が種についての現状に触れ、どのぐらいの品種が減っているかということ、遺伝子組み換えや遺



K・グリーン氏

伝子編集などによる脅威にさらされていることなどの他、商品としてではなく、太古から現在まで続いている種が持っている歴史を物語として、アーティストに表現してもらい発信しているという話をされました。続いて、アリス・カニングハムが秀明自然農法の理念である、種子が生命の源であり、種を守るということは文化を守ること、歴史を守ること、そして連作と自家採種の相乗効果で素晴らしい作物ができるだけでなく、生態系、自然界を守っていけるという話をしました。その後、今橋さんはエイツベリー圃場における実体験を基に、自家採種18年のカボチャはイギリス全土が歴史的冷害に遭ったとき一切被害を受けなかったなど、連作を続けることによって病害虫からも影響を受けず、健全な作物が育っていることなどについて話しました。

最後にメラニーさんは、秀明自然農法を始めてからの体験を話し、「秀明自然農法は、清らかな土、清らかな種、清らかな心が一番重要だと思います」と締めくくりました。

その後の質疑応答では自家採種に関してさまざまな質問が出され、90分のセッションでしたが、時間をオーバーするほどの大盛況となりました。連作で結果を出している自然農法に関心を持たれた方も多く、ここでつながった方々と新しい展開も期待されます。



会場の様子



左からメラニー・ナイトさん、今橋伸也さん、アリス・カニングハム、K・グリーン氏

## セッション

# 自家採種による生物多様性の保全と作物の耐久力向上によって健康的な食生活を促進する（質疑応答）

### ベン・ラスキン（以下ベン）

最初にお尋ねしたいのですが、ここにいる皆さんは、何らかの形で野菜の栽培をしていると思います。ただ自家採種まではしていないのではないのでしょうか？ 種採りが簡単な作物はありますか？ どのようにスタートしたら良いかアドバイスをお願いします。

### K・グリーン（以下K）

栽培を始めてから、作物には自家受粉と他家受粉<sup>\*</sup>の区別があることに気付くことでしょう。エンドウ豆やインゲン豆のような自家受粉の作物は、交雑の心配がなく、同じ植物の中で受粉するので、初心者向きです。私のシード・ライブラリーはこの豆類から始めました。経験を積むうちに、いろいろなやり方が分かるようになります。肝心なのは、自分が大切に思うもの、関係があるもの、好きで何かを感じるものを扱うことです。植えた作物全部から種子を採るのは不可能で、市販の種子を購入することになっても構いません。

こうすべきである、と一律に決めつける必要はありません。種の繁殖には動物の存在も必要です。遺伝的な健康を維持するために、多様性・異なる種族が存在します。交雑を防止するための広い間隔や食料生産のための土地が、誰でも手に入るとは限りません。最初は本当に好きなものを植え、その作物から学んでください。最初のシーズンは、植物の一生を完全に見届けてください。やや広い間隔で植え、栄養が十二分に行き渡るように留意してください。もっと時間も愛情も注いでください。

### メラニー・ナイト（以下メラニー）

当初、私たちはたくさんのトマトを受け継ぎ、それらを栽

培することが義務であると感じていました。ですから、とにかく全ての種類のトマトを栽培しました。ところが、それぞれのトマトが交雑してしまうかもしれない、ということすら知らなかったで、それを聞いたときパニックを起こしました。今は自家受粉させています。

### ベン

実は、作物の一生について取り上げたかったのです。私は以前、伝統的な有機栽培をしているつもりで、輪作や土へ養分を与えなくてはならないという思いで頭がいっぱいでした。十数年前に Shumei に出合ったとき、輪作せずに土に任せるだけの栽培法を理解できず、少し戸惑いました。正直なところ、まだ戸惑いが無いとは言いきれませんが、私が引かれたのは、種子の重要性と、自家採種してその土地になじませることです。

そして、植物が一生を遂げることが土壌微生物の繁栄につながるということを発見しました。そこで正しく検証すれば、これには科学の裏付けがあると思うようになりました。種子や土壌微生物にはたくさんの現象が起きていますが、突き詰めれば、自ずと見えてきます。

### アリス・カニングハム（以下アリス）

もし種採りに失敗しても植物の一生を見ることができるとは素晴らしいと思います。野菜の花がどのようなものか、どれだけの人が知っているのでしょうか。普通は花を見る機会は無く、ただ収穫するだけで、生育の経過や種子まで考えません。けれども、種子は美しく変化し、花を咲かせます。たとえ種採りに成功しなくても、その生育を見届けるうちに、再

<sup>\*</sup>自家受粉とは「花粉が同じ個体にある、めしべに受粉すること」で、他家受粉は「他の個体から、めしべに受粉すること」。植物全体としては、自家受粉よりも他家受粉のほうが多い。



挑戦へのきっかけが生まれ、種子とのつながりを再経験することになります。この自然、作物、種子とのつながりに美を感じると、まるで友人のような親しみが湧き、自分の生活にまで入ってきて、人生の豊かさを増す存在となります。自然を観察するように勧めるのは、Shumei では「自然から学ぶ」という意味で、全てを知っている自然を観察することで、何をすべきかに気付くのです。自然から答えを得るには、メラニーさんが言ったように、注意して自然の声に耳を傾けてください。



#### 聴衆1

私は地域支援型農業(CSA)<sup>\*</sup>に取り組んでいる農家で、この周辺で地元の野菜を栽培しています。自家採種を始めたかと思っていますが、質問があります。今は4年または6年周期で輪作しており、野菜に続く2年間は被覆作物を植えて地力を回復させています。もし、輪作しなくても良いなら、正直うれしいのですが、私は現在他の農家と組んで週に約180世帯に野菜を提供しています。この食糧生産目標を継続するために、どうしたら良いか教えてください。自家採種だけでなく、他の面でも最初にアドバイスがあると思います。初年度に採った種子は、ゆくゆくは全体に含めて良いものか? 苗床用に少し蒔いて育て、次の種子を採る分にするのか? 交雑については、どう対処していますか。



K氏のスライドより

#### K

私たちは、農家に自家採種の方法を教えています。私たちの種子カタログは、現在600種類以上の品種を網羅しています。私たちだけで全ての野菜の種採りは不可能なので、農家の方々に農作業に種採りを加えてもらっています。ほとんどの野菜は、採種の見込みよりもはるかに多くの種子を付けます。畝に育つ野菜から、種子の全部を採種する必要はありません。トマトを1列植えたら、自分の保存用と地域への配布用なら、2、3株からの採種で足りる。レタスの場合、健康な種を採るには、レタスがしおれるまで待たなくてはなりません。種採り用の母株はかなり大きく成長させる必要があり、通常よりも株間を広げるため、選んで収穫する方法を教えます。つまり、1株または3株おきに収穫し、両脇の狭い4株に栄養が行き渡るように協力させます。すると、レタスの母株は30~45センチメートルの大きさ、茎の背丈は2~2.5メートルまで成長します。

本当に、一株あたり何百、何千、何万という種ができるのですが、難しいのは隔離で、どの作物を隔離すべきなのかを知ることです。圃場が狭い場合は、距離ではなく別の何らかの方法で隔離させます。種採りの時期をずらしたり、受粉を助けてくれるものを引き寄せる作物を中間に植えれば、花粉の飛散を防ぐことができます。また、風が花粉を運ぶ場合は、中間で花粉を捕らえる対策をします。

#### ベン

有機農法で育種された種子、その新品種の種子について素晴らしい研修プログラム(seed novelty programme)が現在開かれています。私たちは種子を栽培して販売する農家を対象に、研修会を開いています。

#### 聴衆2

私の質問は先ほどのベンさんと似ています。私は伝統的な有機農家の出身で、農学的には全て知っています。メラニーさんの話にも関連するのですが、パネリストの皆さんにもう少し連作を掘り下げていただきたいのです。種子を同じ土にまいて育てると記憶する、という点です。それは私が自然に思える行為とやや違うのですが、興味があるので、もっと教えてください。

#### アリス

専門的なことは今橋さんが説明できると思いますが、土と種子は一種の共同作業をします。これは分析して分かるのではなく、こうすれば良いけれど、これは駄目、と頭だけで決めません。土と種の力を信じて任せるのは、有機的観点に基づく方法です。毎年同じ場所に植えることで、土と種がお互いに作用して支え合います。

<sup>\*</sup>CSA (Community Supported Agriculture) は生産者と消費者が連携し、流通業者などを介さずに直接契約で野菜を定期購入する仕組み。





イエイツベリー圃場 ファームツアーの様子

私たちは何年間も世界各地の農家と共にこの方法を実践してきました。連作の初期は辛抱が必要で、種と土がお互いに適応し、環境に順応するまで時間がかかります。いったん適応すると、作物は盛んに成長しますが、地域や土壌の状態などにも左右されます。清らかな自然栽培の種を使うとしても、地元のものではないかもしれません。厳しい気候や痩せた土地で採れた種かもしれません。あなたの土地は穏やかな気候かもしれませんし、その逆かもしれません。ですから種と土がその場所に慣れるまで時間がかかります。

どのくらいで種が採れるようになるかは、あなたの圃場次第です。1年目から美しく実がなる場合もありますが、圃場によっては3年から5年かかります。通常は3年が平均的目安で、3年目になると種と土が適合し、種はその記憶力によって、厳しい気候の変化にも柔軟に対応します。日本で台風や暴風に襲われた地域は、稲が倒伏して壊滅的な被害を受けましたが、自然農法で連作を続けていた圃場では全ての稲が起き上がり、被害を免れました。ただし、これは自然農法3、4年目以降の稲にしか起こりません。科学的理由やデータは不足していますが、たくさん事例があります。

#### 今橋伸也 (以下今橋)

私たちの圃場は15種類の野菜を連作で育てており、毎年200～300人の見学者が訪れます。中には、土壌の養分が年々減るので将来野菜は作れなくなる、と忠告する人もいます。2014年、そのような意見に対して、土壌の健康状態を調べるため、連作5年目になるジャガイモを栽培している土のサンプルと、比較するためその隣の草地の土のサンプルを、土壌研究所に送りました。

結果は土壌の健康指数は、草地が2.2、ジャガイモの畝は

5年で3.1でした。5年間自然農法で連作をしても土の栄養素は十分にあり微生物の働きと土の健康状態は良くなったことが分かりました。2019年にはジャガイモ畑だけの土壌サンプルを再び送りました。ジャガイモは連作10年目です。2014年に比べて微生物活性値は4.5に増え、健康指数は6段階中の5.1に上がりました。このデータから10年間連作しても、土壌は栄養を保ち、微生物は活発となり、土は健康を増していることが証明されました。自然農法で連作することにより、美しい土へと変わります。

#### ベン

本当に説得力があります。輪作については、栽培者の保険のように受け取れます。自然界の植物は輪作と違って動きません。つまり、植物は抵抗するように、誤った農業システムに反応します。そこで作物に保険を掛ける必要が生じ、中には、保険が必須の作物もあります。

#### 聴衆3

生産の文化的背景について考えると、自然界の自生植物は野生動物の排泄する種が発端で、単一栽培の商品作物とは異なり、多様性があります。そこが難しい点です。

#### 聴衆4

種の記憶についてのコメントでしたが、私が興味があるのは連作の方です。植物の土壌生物学的な関係、つまり、植物のマイクロバイーム(微生物叢)\*との関係は、私のイメージでは、氷河に入り込む水のような関係です。

\*マイクロバイーム(微生物叢)は、生きた微生物集団の全体を指す用語で、また微生物集団が有する遺伝情報の全体を指す。





連作 13 年目のジャガイモを収穫する今橋さん

	Microbial Activity (微生物の働き)	Soil health Index (土の健康状態)
2014年 草地	1.8	2.2
2014年 ジャガイモの畝 (自然農法 5 年目)	2.7	3.1
2019年 ジャガイモの畝 (自然農法 10 年目)	4.5	5.1

### 聴衆5

私の感覚では、連作をすると、作物に土壤との微生物学的関係が構築されます。よってマイクロバイオームは、種に感染して受け継がれます。Shumeiの連作では、微生物群が同じ場所に留まり続けるので、作物と土壤微生物集団の関係はそこに確立され、最初からそのつながりは促進されると解釈しています。素晴らしい研究も幾つか発表されており、その例として、ジェームズ・ホワイト博士の論文、ローザ・フォギーの微生物群についてツイートが挙げられます。

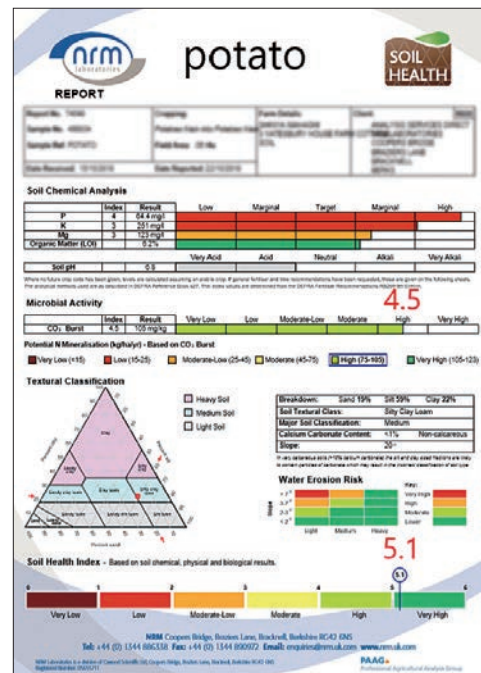
マイクロバイオームの影響が種によって広がるとしたら、全ての微生物集団は次世代の作物に影響を与えるでしょう。それは直感的に、これまでの歴史的常識に反する考えです。けれども、掘り下げてみると、理屈が見えてきます。ただ疑問が残るのは、圃場の生態系にどう影響しますか？ ジャガイモに虫害は出ませんか？

### 今橋

私たちの圃場は 2010 年に始まりました。基本的に虫害や病気の被害はありません。私たちの作物は、虫や病気にとっても強く、それを防ぐ力があります。虫や病気については、私たちは敵とは見なさず、友達として受け入れます。土と種を浄化するために畑にやってくるからです。土が汚れていたなら、それを掃除するために来るのです。この役割を持つ病気や虫は友達であり、全く問題ありません。

### ベン

健康指数 5.1 は信じられません。とてつもない多様性が保たれているのだと思います。藻類のような微生物やぞっとするほどのミミズのような虫たちが存在すると想像します。



2019年 土壌の調査結果

### アリス

基本的に、私たちは虫を害虫とは見ません。なぜなら、害虫が発生する理由は、根本的に土壤の生態的バランスが崩れているからです。土が健康で、微生物が十分に活動していれば、土は自力で再生し、土は栄養を取り戻します。今橋さんが話したとおり、作物は強靱に自己防御して、害虫を払いのけます。害虫は肥毒に引き寄せられ、畑や地域の生態系が崩れたときに発生します。

つまり、土壤が健康な状態であれば、畑や作物は害虫の被害を受けません。

### K

同じ作物から何世代にもわたって種を採り続けるといっても、害虫や病気の被害を受けた作物は枯れてしまいます。そこで生き延びた健康な作物から種子を採ることになります。健康な作物とは、圃場の土と協働しながら生長し、そこに発生した害虫や病気から立ち直りつつある土で育つ作物を指します。

自家採種による作物の向上について、肝心な部分が抜けていたように思います。つまり、種子は全て健康な作物から採らなくてはいけない、と言っているわけではなく、種採りをしなければ、病害虫の困難を耐え抜いてきた遺伝子を絶やしてしまうという大切な問題です。そして各地域の栽培の適する種子が生まれ、同じ種を本来の同じ地域から得られるようになります。

種子の生育が良いのは、その自家採種した元の場所に植えた場合です。同じ作物で同じ品種でも、場所が影響します。種子には地域性があるので、自分の農場で自分のやり方で作物を育て、種子を採ってください。



## メラニー

私には数々の失敗談があります。最もショックだったのは、ニンジンに多いサビバエの被害を受けたときでした。Shumeiのラーニングコースを通して、それは浄化が起きたと理解するようになりました。作物は自分自身を浄化するために必要なものを引き寄せているのです。皆さんは浄化に余計な手を出さず、作物を辛抱強く見守ってください。土壌や種子に残留する毒を浄め尽くし、土と種のバランスを保つには、2、3年かかります。土壌内の毒の残留値が高ければ、もっと長い年数が見込まれるので、その間は辛抱が必要です。

栽培者が根気よく信じ続ければ、作物は浄化を柔軟に乗り越えて、各部にその影響を受けた作物は、病害虫を引き寄せないようにたくましく成長します。今橋さんの資料にありましたが、ウンカの壊滅的被害を受けた田んぼ、全く元気な中央の田んぼ、中央を飛ばしてウンカが攻撃した隣の田んぼがありました。その中央は自然農法の田んぼです。

## ベン

田んぼの生育はさまざまで、多様性はあって当然です。

## 聴衆6

何もしないと云われましたが、被覆のマルチング\*も使わないということですか？

## 今橋

私は何もしていません。堆肥は作っていますが、圃場ツアーで見せるためです。自然農法は自然堆肥を使いますが、土の栄養補強ではありません。堆肥の役割は、`土を固めない、`温める、`乾かさない、`ことです。この3条件がそろった土であれば、堆肥を使う必要はありません。もし、土が硬くて困っている場合は、自然堆肥の使用をお勧めしますが、堆肥の量は極力減らしてください。堆肥を使いすぎると土が弱まるからです。土の力に任せて野菜を育てる、という点が急所です。私は圃場の土に13年間何も入れていません。お見せしたように、土の状態は年々良くなっています。野菜はとてもよく育ち、年々生育状態が良くなっています。



グリフィン・グロワーズ農場 看板に自然農法の理念が書かれている

## K

私の話は、種子の由来と多様性を芸術で称える取り組みについてでした。種について見聞する情報は、必ずしも信憑性があるとは限らないことをご周知ください。栽培の主流は、ある経済的地位を持つ権力者に支配されているからです。

育種業者をはじめ多くの組織をひいきして、種にまつわる話を好きなように舵取りさせてしまうのです。例えば、このハニーナッツカボチャは、小型のバターナッツカボチャです。とてもおいしく、バターナッツを凝縮したような味わいで、アンケートでも好評でした。コーネル大学がこの品種を発表し、ニューヨーク・タイムズが取り上げました。

ハニーナッツカボチャは、コーネル大学教授で栽培者のマイケル・マズーレック氏と有名なシェフによって開発された新品種のように発表されましたが、実際この育種に携わったのはモリー・ジャンです。しかし、彼女については言及されませんでした。社会を多方面から検討すると、種子について明らかに言えるのは、女性は科学分野で信用や評価を得られない、ということです。知識豊富なモリーという天才的女性栽培者は、育種の話から完全に帳消しにされたのです。

私は種の背景を起点までさかのぼり、関連事実を調査しました。すると、育種開発に使用されたうちの一つは、バターナッツカボチャという新品種であることが分かりました。バターナッツはマサチューセッツ州の農業試験場が開発した新しい品種です。

## ベン

この由来を付けて、栽培会社に紹介したのですね。

## K

そうです。(ウリ科の植物である)カボチャの起源をたどっていくと、アメリカからヨーロッパに伝わっています。調べていくと私の系譜に当たるトルコ人が初めてカボチャを恐れずに調理して食べ、トルコの食物としてヨーロッパ各地へ伝わっていったことが分かりました。

さらにそれ以前について、モホーク族(ニューヨーク州北部のモホーク川とハドソン川流域に住んでいた先住民)の暮らしを調査しました。バターナッツの遺伝的原形は、先住民のカボチャです。これはクルックネックカボチャと呼ばれ、ハニーナッツカボチャの親に当たります。ヨーロッパに渡る前の古い品種です。

さらにさかのぼると、糞の話にたどり着きました。マストドン(マンモスに似た原始的な象)の糞の化石にカボチャの種子がありました。古代まで歴史を振り返ると、人類がカボチャと関係を持つ前に、大型動物とウリ科植物は既に関係し合っていました。生態系、種の由来、自然を広い目で見ると、人類が種子を得られたのは、種子が自然界の他の存在(動物、

\*マルチングとは、植えた植物の地表面をビニールなどで覆うことで、雑草の発生、水分の蒸発や病害虫の発生を防ぐ。





ハニーナッツカボチャとその種のパッケージ：小さなマストドンの姿が見える (© Hudson seed company)

植物、バクテリア等)と先に関係したからです。人間とウリ科植物を初めてつないだきっかけはマストドン<sup>\*</sup>の絶滅でした。その結果、人類が初めてウリ科植物種子を得ることができ、広範囲な繁殖を経験するに至りました。

このような複雑に絡み合う物語を伝えることができる人材を探しました。そうして見つけたのがこのアートで、版画家のバレリーさんを選びました。拡大すると、縮小されて隠れているマストドンが現れますが、小さな害虫のようにも見えます。最終的にこの作品は、マストドンの歯の化石の隣に並んで、スタテン島に展示されました。

種子の仕組みはどうなっているのでしょうか？土の場合は、どう説明しますか？土にもさまざまな話がありますか？おそらく、皆さんには慣れている話があるでしょう。ただし、土の世話はこう聞いていますとか、こうするだけです、とは違います。こうして一堂に会する意義は、さまざまな方法を学び、さまざまな視点を聞き、皆が一様に同じ事をするのではない、と気付くことです。違って当然なのです。私たちのように作物を選んで育て、自家採種を始めてください。選ぶ作物は、意味のあるもの、最も健康的なもの、最もおいしいもの、最も美しいものなどです。

私は種子の物語を伝えたいので、徐々に追加していくつもりです。アーティストのバレリーさんは、現在を中心に置いてこの作品を表現しました。つまり、収穫した種の恵みを中央で分かち合うと、これが絡み合っ、この縮小マストドンの歴史をさかのぼる多くの物語が、そこに織りなされています。これはアーティストが種の物語を表現した単なる一例に過ぎません。皆さんがかみ砕いて話せる内容ではないでしょう。それこそがこの作品の美であり、魂なのです。物語をさまざまな表現で伝えているのです。Shumeiの皆さん、これまで学

ばせてもらった全ての事に感謝します。ご出席の皆さん、これは素晴らしい会議です。ありがとうございました。



ハドソンバレー・シード・カンパニーで販売している種のパッケージ

### パネリストプロフィール



#### K・グリーン

2004年に種子の保存活動を行う「ハドソンバレー・シード・ライブラリー」を創立。その後、ハドソンバレー・シード・カンパニーに社名を変更。在来種子の栽培・保存と販売に取り組み、種子のメッセージを芸術として発信している。



#### 今橋伸也

イエイツベリー農場にて秀明自然農法による野菜を栽培。国内外の各メディアで取り上げられる。現在 ユーチューバーとして自然農法を発信。チャンネル登録者は19,000名、個総再生回数は200万回を超える

<sup>\*</sup>マストドンは、約4000万年前から約1万年前まで地球上に生存していたゾウやマンモスに似ている大型哺乳類の総称。





親子で茶道体験

## 芸術と食×子どものみらい

# 「滋賀キッズミュージアム in MIHO MUSEUM」

こどもたちと一緒に美術館で美しいもの、おいしいものと出合える素敵な一日を！

6月18日、滋賀県内初となる、美術館で「アートと食」をテーマにした子ども向けのアートイベントが、MIHO MUSEUMで開催されました。

「滋賀キッズミュージアム in MIHO MUSEUM」は、「芸術と食×子どものみらい」をテーマに、美術品の鑑賞やいろいろなアート体験、そして肥料も農薬も一切使用していない体にうれしいお食事を楽しんで、子どもたちに心も体も幸せなしてほしいという願いで企画されたものです。

昨今、コロナ禍で増加している子どもの心と健康の問題に対して、WHO、ユネスコ、文部科学省などが、課題解決に向けて各関係機関へ協力と支援を求めています。2011年の東日本大震災後、秀明インターナショナルは「滋賀キッズミュージアム実行委員会」のメンバーとして、3年間、福島県いわき市の被災した子どもたちのために「芸術と食」の支援活動「滋賀キッズミュージアム in 福島」に参画しました。当時のいわき市の方々は原子力発電所事故により、私たちには想像もできないほどの不安を抱えていました。そんな中、キッズミュージアムに来場された多くの方々の声により、アート体験と体に優しい安全安心の食が、とても大きな支援になることを実感してきました。

2023年4月、滋賀次世代文化芸術センターの齋藤俊信センター長（元滋賀県教育長）は、「(コロナ禍によって)日本全体



列をなす来場者

が被災したことと同じだと思う。3年間、我慢してつらい思いをしてきた子どもたち。今度は滋賀の子どもたちのために、「芸術と食」をテーマに支援活動ができないだろうか」「会場は、開館当初から「芸術と食」を発信されているMIHO MUSEUMしかない」との呼び掛けにより、今回再び、県内のNPO、芸術家、学校関係者の方々が集まり、「滋賀キッズミュージアム実行委員会」が立ち上がりました。

MIHO MUSEUMが滋賀県内の学校と連携した芸術体験授業を継続し、その活動を通して不登校で課題を抱えている子どもたちが変容していくというこれまでの実績もあり、この企画初回の会場はMIHO MUSEUMでと決まりました。MIHO MUSEUMとしては休館期間中に子どもたちのために無料開館





シードジュエリーづくり



鳥獣戯画の模写



親子で絵付け体験

するという、画期的な開催となりました。

当日のプログラムは次のようなものでした。

展示室では、春季特別展「美の祈り Universal Symphony」はじめ、全館にわたって展示されている作品を鑑賞できるようにしました。昨年秋に重要文化財指定がニュースとなった「鳥獣人物戯画」をこの日だけ特別に公開され、各所で学芸員によるギャラリートークも行われました。

アート体験としては、学芸員による乾山の器と鳥獣戯画についてのお話を聞いたあと、鳥獣戯画の模写、陶芸家と一緒に絵付けの体験、茶道家とお茶を点てる茶道体験、秀明自然農法ネットワークによる種のことを学んで種のアクセサリ作り、MIHO美学院中等教育学校の生徒による太鼓演奏やダンスのミニステージなどのブースが設けられました。

食のテーマでは、レストランシェフの手ほどきによる器に盛り付ける体験、お箸の使い方のワークショップ、そしてこの日の特



特製サンドイッチ

学芸部長による乾山のお話

別メニューとして秀明自然農法の食材による竹皮弁当、パンやサンドイッチの販売を行いました。

子どもたちとご家族が、美しいもの、おいしいものと合って笑顔あふれる場となるよう、それぞれの得意分野でさまざまなプログラムを企画、総勢200名近いスタッフが集結し来場者をお迎えました。

当日は天候にも恵まれ、入場者数657名、ワークショップ参加人数延べ1,502名の大イベントとなりました。





## 以下、参加者の感想から（抜粋）

- ・素晴らしい空間でくずっていた子どもが入口から足取りが軽くなりました。  
茶道体験、種のアクセサリー作りで子ども大喜びでした。
- ・食に関するプログラムはとても考えられたプログラムだと思いました。
- ・太鼓がすごかった。
- ・サンドウィッチがおいしかった。
- ・鳥獣戯画の模写で、子どもたちの新たな一面が見られました。
- ・食事を盛り付けるポイントが分かり、おいしく食べさせていただきました。
- ・創意工夫を刺激する、子どもにとっても良いものだったと思います。
- ・種について興味を持てました。自分の選んだ種の入ったキーホルダー！すごく大事そうに見せてくれました。
- ・絵付け とても満足のできる体験で、またやりたいとのこと。
- ・抹茶・お菓子（どら焼き）がとってもおいしかった。自分で抹茶を点てられたのもよかったです。
- ・楽しそうに和気あいの空気が伝わってきて、いい空間・時間でした。  
素晴らしい企画をありがとうございました。普段 美術品だけで退屈している子どもがワークショップのお陰で楽しめました！
- ・日本の美術館は子ども NG のイメージがあり、幼いときに通う子どもが少なく、美術への壁が大人になっても厚いように感じます。もっともっと幼い頃から多くの美術品を見る期間があればと思っていたところ、こちらの企画を知り、とてもうれしく思いました。
- ・器に食材を盛り付けるコツを教えていただけてとてもよい体験ができました。  
(中学校教員として) 授業での指導に使わせていただきます！
- ・美しい美術品を見て、本格的なアート体験ができて、身体に良い自然な食材のおいしいものを食べられて、素敵な一日でした。



盛り付け体験



キッズミュージアム限定メニューの竹皮弁当

## 最後に

実行委員長の齋藤センター長は、「美しい芸術と美しい食をテーマにこのような支援活動ができたのは、MIHO MUSEUMのお蔭です」「特に美術館内に食の部門を持ち、全ての食材も自然農法で手配できるそんな美術館は、海外の世界的美術館もできないこと。そういった意味で、MIHO MUSEUMは世界にひとつの美術館と言えます。そして今回のプロジェクトは小さな一歩ではありますが、新しい美術館の在り方を社会へ向けた大きな一石になると信じています」とおっしゃいました。

来場者からの多くの喜びと感謝の声と子どもたちの笑顔を胸に、今後も、子どもたちと一緒に美術館で美しいもの、おいしいものと出合える素敵な一日をお届けできますよう、支援の輪を広げていきたいと思えます。

MIHO 美学院生徒による太鼓演奏











NPO法人 秀明インターナショナル

〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代353-1

TEL:0748-82-3140 FAX:0748-82-3143

E-mail : info@nposhumei.or.jp

https : //www.nposhumei.or.jp



2023年6月30日発行